

第18回FDフォーラム

学生主体の『魅力ある授業づくり』—学生に興味を持たせる術はあるのか?—

大学教育研究センター副センター長 経営学科 教授 寺澤朝子



2011年10月12日、1521講義室で第18回FDフォーラムが開催された。

基調講演

講師：丹羽健夫氏（河合文化教育研究所主任研究員）

パネルディスカッション

パネリスト：丹羽氏

高比良美詠子准教授（心理学科）

杉井俊夫教授（都市建設工学科、大学教育研究センター副センター長）

コーディネーター：芳川 猛客員教授（大学教育研究センター、元東海テレビアナウンサー、
現東海テレビプロダクション相談役）

第18回FDフォーラムは「学生主体の『魅力ある授業づくり』—学生に興味を持たせる術はあるのか?—」をテーマに開催された。そこでの基調講演の概要とパネルディスカッションの様相を紹介し、今回のフォーラムから得られた知見を提言としてまとめてみたい。

基調講演

前半は、丹羽健夫氏による『魂をゆさぶる人気講座』の基調講演が行われた。丹羽氏は、いろいろな例を挙げつつ、学生にとって魅力のある授業をするためには、教師の社会性が重要であると強調した。PISAテストが例年トップクラスのフィンランドでは、教育実習が日本よりも充実しているだけでなく、教師が社会で働いた経験を持っていることが多いという。また、全国隅々にあった寺子屋が日本の識字率世界一をもたらしたが、寺子屋の師匠は、教師専業ではなく、本業がありながら、地域の子どもらに教育を行っていたことが分かっている。他方、現在の予備校で人気の高い講師は、授業の中で子どもたちがなるほどと思うような面白い話を巧みに繰り出すことができる。



第18回FDフォーラムの様子

その理由は、講師自身が、話題の引き出しを数多く持っているからである。

パネルディスカッション

後半のパネルディスカッションは、芳川 猛客員教授にコーディネーターをお願いし、パネリストとして、丹羽氏、高比良美詠子准教授、杉井俊夫教授に登壇していただき、フロアを交えて活発なディスカッションが行われた。

まず、丹羽氏は、人気のある授業をする予備校の講師は予習を怠らないことを紹介した。例えば、90分間の授業のために7時間かけて予習をする。利用するテキストを読んでシナリオを作り、次はそのシナリオによる教育効果を最大にするための言葉選びを慎重に時間をかけて行うそうである。高比良准教授は、自分が『週刊文春』で、学生に人気のある講座として選ばれた第一の理由は楽しそうに授業をしていることではないかと考えている。学生は、教員が楽しそうに面白そうに教えている様子を見て、その専門分野に興味を持ってくれる。そのためには、やはり授業内容を事前に練り上げた方がうまくいくように思うし、自分の経験や友人の経験など、具体的な例をたくさん出すことで、学生自身にも役立ちそうだと気付かせることが大切であると発言した。杉井教授は、講義室の中で一体感を作り出すことと教員との信頼関係を構築することを重視している。シャトルカードを使って、教員と学生とのコミュニケーションを図り、演習問題をグループで解いたりしながら、学生間のコミュニケーションを促

進し、仲間意識を作り出すと教室の雰囲気は良くなるという。教員側も、教員同士が話し合う機会、丹羽氏の言う社会性を豊かにする機会をつくるのが大切で、まったく異なった専門分野の授業を見学し合う本学の「授業サロン」などは教員同士が情報交換する場としてうまく機能するのではないかと主張した。

学生に興味を持たせる 授業づくりへの提言

基調講演、パネルディスカッション、フロアとの活発な意見交換を通じて、学生に興味を持たせる『魅力ある授業づくり』のためにわれわれ教員が心掛けた方が良いと思われる点をいくつか提示してみたい。

1. 教員の豊かな経験や知見からもたらされる話題の豊富さが、学生の関心を喚起する。従って、教員自身が社会性をさらに豊かにする努力を怠らないことが大切であろう。
2. 教員が自分の専門分野に魅力を感じており、それを熱心に学生に伝えようとする姿勢が、「この専門分野は面白そう」と学生に気付かせ、学習意欲の向上につながるのではないかと。
3. 受講する学生をイメージし、同じ目線に立つことを心掛けて、授業の準備をする必要がある。
4. 授業中における学生との相互作用の仕掛けをうまく作り、学生自身が参加意識を持つような授業形態を考えてみる。
5. 最初から学習意欲や関心が高い学生などいないことを前提に、教育手法を工夫して、最終的に関心や意欲を学生に持たせるような授業をすることが肝要であろう。

これらの気づきから、われわれ教員も授業を通じて学び、取り組んでいく姿勢が大切であるとあらためて考えさせられたフォーラムであった。